

# AMCoR

Asahikawa Medical University Repository <http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/>

卒業研究抄録集(看護学科) (2017.12) 平成29年度:23-24.

訪問看護を利用している在宅肺がん患者の食の意味—半構成面接を通して—

宮澤 あゆみ, 吉田 若佳奈

# 訪問看護を利用している在宅肺がん患者の食の意味 -半構成面接を通して-

宮澤あゆみ 吉田和佳奈  
(指導：山田咲恵)

## 緒言

がん患者のうち、肺がん患者は14.6万人で、国立がん研究センター<sup>(1)</sup>によると2016年の部位別がん死亡数は肺がんが1番多い。肺がんは呼吸困難、咳嗽、喀痰などの症状がみられ、晩期になると加えて体重減少、疼痛、消耗性疲労がみられることもある。平田ら(1997)<sup>(2)</sup>は、在宅癌患者にとって食事ができる状態を維持するために最大限の努力をすることはQOLの向上につながると述べている。疾患を抱える人の食には、共に食事をする人や人生背景が影響すると考える。そのため、本研究では訪問看護を利用している在宅肺がん患者の食の意味を明らかにすることを目的とした。

## 用語の定義

- ① 食の意味:食物に加え、食事をする場、一緒に食事をする人などを含めた食への思い
- ② 在宅肺がん患者:医療機関に入院せず療養している者
- ③ 回復期から維持期:ターミナル期までの間(Dietzの分類)

## 方法

**研究対象:**肺がんであることを告知され、現在訪問看護を利用しており、在宅での生活が1年以上経過している者。(疼痛コントロールを目的とした入院は含まない)

**調査方法:**対象者の自宅で、プライバシーに配慮

表1 在宅肺がん患者の食の意味

カテゴリ	サブカテゴリ	コード
幼少期の生活背景が肺がん経験を得た今の食の嗜好や信念に影響を与えているという思い	幼少期から食べていたものを肺がん経験を得た今でもふと食べたくなる	疎開先で食べていたニンジンなど昔から慣れ親しんだ味は今でもふと食べたくなるもの 今もニジンのチラシを見たら何回も買って食べるほど好き
	小さいころは戦争中で好き嫌いを言っていられなかったから今でも好き嫌いはない	小さいころは戦争中だったためご飯を食べるのがやっつとで、贅沢や好き嫌いを言っていたら食べられないから何でも食べる
病気になる前と治療が終了した今との食事の感覚のずれ	作る前に想像していた味と実際に食べた時の味のずれ	ソイの半分を煮て、半分を味噌につけておいて、焼いたらいいなと思って作ったが、食べてみたらそうでもない 作る前は、自分の味で食べたい、作ってみたいという気持ちが強いが、いざ作るとそうでもない
	食べたいと思っている量と実際に食べることができる量のずれ	いざ食べる段階になると、こんなだったろうかというくらいに食が進まない 食べたいと思っているほど量がたべられない
体調が優れなかったとしても抱く食へのこだわり	お弁当の味や量と自分が食べたい味や量の不和感	お弁当一食分を2回に分ける形になるため自分には合わない お弁当は1回に一食全部はたべきれない
	食べ方や保存方法を工夫して作る楽しさ	余ったカボチャは団子にしておけば色んな食べ方ができる 作るときはこういう風にしたらおいしだろうなと思う
	今まで作ってきた料理を今までのように食べたいという気持ち	今まで作ってきたものを食べてみたいと思う 里芋の味噌煮やれんこんのきんぴらを作って食べたいと思う
	体調が優れず、調理を手伝ってもらっていても、味付けだけは自分でしたいというこだわり	切るものや下ごしらえは介護さんに手伝ってもらうが、味付けは自分でしたい
	好きなものを、好きな食べ方で食べたいという気持ち	わらびやフギを塩漬けにしたものや、ウドが大好き 魚なら三度三度食べてもいいくらい好き
元気で生活するためにはしっかり食べなければならぬという思い	口から食べることや食事を残さないことが大事	口から入れるのが一番だと子供に言われるため、少しでもいいから口から食べようと思っている
	自分のためにも家族のためにも食事をとらなければならないという思い	今の生活が最高の幸せで、夫婦二人で1日でも長生きしたいと思っているから食べる 妻に好きなことをしてもらうためには自分が元気である必要があるので食事をしっかり食べている

し、研究責任者・訪問看護師同伴のもと、学生1名が対象者に対してアンケートを実施後、半構成面接を行う。面接時は患者に了承を得てICレコーダーに録音した。

**調査内容:**インタビューガイドに沿って行った。インタビューは個人特性調査用紙を用いたアンケートと半構成的質問用紙による面接法で行った。

**半構成的質問の内容:**食の意味として①食事の楽しみ②誰とどこで食べることが楽しく感じるか③季節に応じた食などから四季を感じているか④体調が悪くても食べたいと思うものは何か⑤小さい時から食べていて好きなものは何かとした。

**データ分析方法:**アンケート結果は、個人特性の調査に利用した。インタビューは得られたデータについて内容の類似性によってカテゴリ化した。

**倫理的配慮:**本研究は、本学倫理委員会の承認(承認番号17040)を得て行った。対象者には研究の目的、方法、倫理的配慮、研究参加は自由であること、匿名性を確保することを書面と口頭で説明し、書面で同意を得て実施した。

## 結果

Aさんは70代男性、妻との二人暮らし、インタビュー時間63分。Bさんは70代女性、独居、インタビュー時間61分。逐語録から84のコード、15のサブカテゴリ、5のカテゴリを抽出した。カテゴリを【】サブカテゴリを〈〉で表した。



食を通して感じる家族や友人へのありがたさ	家族や友人が自分の身体を心遣ってくれるありがたさ	食事の中心は野菜で、妻が気を使い野菜を毎食用意してくれるのがありがたい 季節のものやおいしいものを友人が持ってきてくれることがありがたい
	旬の食材を食べることで季節を感じられる楽しさ	今年も友人からいただいたおかげで春先に季節のものを食べることができてありがたい チラシを見てカボチャや魚、果物を買って食べて季節を感じている
	おいしく感じられる家族との食事の楽しさ	1か月に1回娘が来て3人で夕食を食べるのが一番の楽しみ 誰かがいればにぎやかで1人より食が進む
	食材や料理の準備を通して家族のことを考える楽しさ	娘が来た時に何を食べさせるかをチラシを見ながら2・3日前から話すことが楽しい

## 考察

### 1. 幼少期の生活背景が食へ与える影響

【幼少期の生活背景が肺がん経験を得た今の食の嗜好や信念に影響を与えているという思い】の中には〈幼少期から食べていたものを肺がん経験を得た今でもふと食べたくなる〉〈小さいころは戦争中で好き嫌いを言っていられなかったから今でも好き嫌いはない〉といったものがあつた。このことから、幼少期の生活背景は現在の食事における価値観・信念・嗜好に大きく影響していることが考えられる。現在でも好きな食べ物というものは、幼少期からほとんど変化せず、故郷に由来するということが考えられる。ふと食べたくなるということは、食欲があるということであり、食欲は生きる意欲へとつながる。疾患を抱え、万全じゃない状態でありながらも、慣れ親しんだ味を食べることで、健康的な側面を引き出すことができると考える。以上より、患者の幼少期の話を傾聴し、幼少期の生活背景を知ることで、患者自身を理解した上で食べられそうなものを提案するなどの関わりをもつことが大切だと考える。

### 2. 肺がん経験を得た人の食事のこだわり

【病気になる前と治療が終了した今との食事の感覚のずれ】の中には〈作る前に想像していた味と実際に食べた時の味のずれ〉〈食べたいと思っている量と実際に食べることができる量のずれ〉といったものがあつた。【体調が優れなかったとしても抱く食へのこだわり】の中には〈お弁当の味や量と自分が食べたい味や量の不和感〉〈食べ方や保存方法を工夫して作る楽しさ〉〈今まで作ってきた料理を今までのように食べたいという気持ち〉〈体調が優れず、調理を手伝ってもらっても、味付けだけは自分でしたいというこだわり〉〈好きなものを、好きな食べ方で食べたいという気持ち〉といったものがあつた。肺がん患者は抗がん剤などの治療後、一時的に食事摂取量の減少がみられるが、そうした中でも好きなものを自分なりに工夫し、おいしく食べようと一食一食を真剣に考えることにつながっていた。食べられないから食べられそうなものを仕方なく食べるのではなく、食べられなくても、食べたいものを食べられるようにこだわりを持ち工夫していた。食に向き合うことを大切にしていることから、食に対する譲れないこだわりを尊重した関わりをすることが大切だということが考えられる。

### 3. 家族や友人との食

【食を通して感じる家族や友人へのありがたさ】の中には〈家族や友人が自分の身体を心遣ってくれるありがたさ〉〈旬の食材を食べることで季節を感じられる楽しさ〉〈おいしく感じられる

家族との食事の楽しさ〉〈食材や料理の準備を通して家族のことを考える楽しさ〉【元気で生活するためにはしっかり食べなければならないという思い】の中には〈口から食べることや食事を残さないことが大事〉〈家族や友人が自分の身体を心遣ってくれるありがたさ〉といったものがあつた。自分が健康であるためには食事をとることが重要と考え、健康維持を目的として食事をしている。一方で家族のためにも元気でいたいという思いがあり、家族のことを考える機会となったり、自分のことを心遣ってくれるありがたさを感じる機会となっていると考える。疾患を抱えていたとしても、父として、母としての役割や、家族のために何かをしたいという思いは変わらない。大野ら(2017)<sup>(3)</sup>は、食支援を身体的な健康だけでなく、楽しみや家族との関わりなど生活全体のありようを踏まえたうえで理解し、その人らしい生活の基盤となるケアにつながることを大切であると述べている。つまり身体的な健康と、精神的な健康は必ずしも比例するわけではないといえる。家族は患者にとって大きな存在であり、影響を与えているため、患者本人だけではなく、家族にも目を向けた看護を行うことが大切だと考える。

### 4. 研究の限界

本研究では研究対象者の条件を在宅での生活が1年以上としていたため、肺がんの症状は比較的落ち着いており、体調が安定している状態であつた。よって、在宅肺がん患者における研究よりも、在宅で養生している患者の研究に近いものになっている。また、対象人数が2名と少なかったため、対象人数を増やして探求していくことで、さらに研究を深めていくことができると考える。

#### 謝辞

本研究にご協力いただきました参加者、および参加者の紹介にご協力いただきました訪問看護ステーションの皆様にご心より感謝申し上げます。

#### 引用文献

- (1) 国立がん研究センター：最新がん統計  
[http://gan.joho.jp/reg\\_stat/statistics/stat/summary.html](http://gan.joho.jp/reg_stat/statistics/stat/summary.html)
- (2) 平田 章二、前野 宏、上村 康子.(1997). 在宅癌患者の「口から食べること」の意義とその可能性. Supplement IV, 第24巻, 505-509.
- (3) 大野 かおり、坂下 玲子、小枝 美由紀.(2017). 在宅での生活支援の中で行われる食支援の実際-食支援を積極的に展開している訪問看護師の取り組み-. UH CNAS, RINCP Bulletin Vol. 24, 37-38.